

中学生の保護者を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査

金山元春・中台佐喜子・前田健一

The survey of the needs for social skills education of junior high school student's parents

Motoharu Kanayama, Sakiko Nakadai, and Kenichi Maeda

本研究では、中学生の保護者を対象として、①学校（保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校）で社会的スキル教育を実施することに、どのくらい必要性を感じているか、②学校で社会的スキル教育が実施されるとすれば、どのようなスキルを取り上げてほしいと思うかの2点について調査した。主な結果は次のとおりであった。①社会的スキル教育の必要度の評定値は、保育所から中学校まで階段状に増加しており、中学生の保護者は中学校の時期を社会的スキル教育が最も必要な時期と考えていた。②社会的スキル教育で取り上げてほしいスキルは、「相手の気持ちを考えて接する」「上手に相手の話を聞く」「自分の意見や考えをはっきりと伝える」が上位3位であった。

キーワード：社会的スキル教育、保護者、中学生、ニーズ

問題と目的

社会的スキルとは「円滑な対人関係を形成、保持していくために必要な認知的判断や行動に関する技能で、学習可能なもの」（吉村, 2003）をいう。社会的スキルの学習可能性に着目し、個人に必要な社会的スキルを補足的に学習させることによって、社会的不適応の改善を図ろうとする訓練が社会的スキル訓練である。社会的スキル訓練はこれまで、社会的不適応児に対する治療技法として実施されてきた。しかし、少子化や核家族化あるいは都市化の進展に伴って、日常生活の中で社会的スキルを学習する機会が急激に不足している現状では、一般の子どもを対象とした教育技法としての社会的スキル訓練を学校教育の中に取り入れる必要があると考えられる。一般の子どもに広がる社会的スキルの学習不足は、不登校、いじめ、学級崩壊など、急増する子どもの社会的不適応の背景とも考えられている（河村, 1999）。

社会的スキルの学習不足に起因するさまざまな問題を予防し、子どもの健全な社会性を育成するために、学校において一般の子どもを対象として実施される社会的スキル訓練は、社会的スキル教育と呼ばれる。社会的スキル教育はここ数年で、教育関係者の間に急速に浸透することとなった。教職研修のテキスト（例えば、藤枝, 2002；森田, 2003）や全国各地の教育委員会、教育センター主催の研修会（例えば、平塚市教育委員会, 2004；長野県総合教育センター, 2004）などでも、いまや

社会的スキル教育は重要な教育技法の1つとして取り上げられている。しかしながら、実際の学校現場では「その名称を聞いたことがある」という程度の理解が一般的といわれる（小林, 2003）。

社会的スキル教育の学校現場への普及を進めていくためには、社会的スキル教育に対する教諭の認識や評価を知るための研究が必要となるだろう。なぜなら、社会的スキル教育は、上述のように予防的・発達の観点から実施されるものであるので、実施の主体は研究者やカウンセラーではなく、学校の教諭となることが予想されるからである。そこで中台・金山・斉藤・新見（2003）は、社会的スキル教育に対する教諭の認識や評価を知るために、小学校教諭と中学校教諭を対象に次の2点について調査を行った。1つは、学校で社会的スキル教育を実施することに、どのくらい必要性を感じているかについてであった。調査では、保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校と各発達段階における必要度をそれぞれ評定させた。その結果、小学校教諭は保育所から中学校まで階段状に評定値が増加し、中学校の時期を社会的スキル教育が最も必要な時期と考えていること、一方、中学校教諭は小学校3・4年を頂点に発達早期から社会的スキル教育を実施する必要があると思っていることを明らかにした。もう1つの調査は、自分が勤務する学校で社会的スキル教育を実施するとすれば、どのようなスキルを取り上げたいと思うかについてであった。調査の結果、小学校教諭、中学校教諭ともに「相手の気持ちを考えて接する」や「イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」といったスキルのニーズが高いことがわかった。

こうした調査から得られた結果が、学校現場に社会的スキル教育を普及させる上で貴重な資料となることは間違いないだろう。しかし、社会的スキル教育を学校教育の中に定着させるには、学校現場の教諭だけでなく、児童生徒の保護者が社会的スキル教育をどのように認識し、評価しているのかについて知る必要があるだろう。保護者からの理解と協力が得られにくい取り組みは学校教育の中に定着することは難しいだろうし、逆に保護者からの理解と協力が得られやすい取り組みは学校教育の中に定着し、大きな成果を生むものと考えられる。学校における心理教育プログラムの開発に関する最近の研究は、プログラムの成功には保護者の理解と協力が重要であることを明らかにしている（例えば、Reid & Eddy, 2002）。保護者の社会的スキル教育に対する認識や評価を知るとは、今後の社会的スキル教育プログラムの開発に貴重な示唆を与えるものと考えられる。

そこで本研究では、中学生の保護者に対して中台他（2003）と同様のニーズ調査を実施した。すなわち、①学校（保育所、幼稚園、小学校、中学校、高校）で社会的スキル教育を実施することに、どのくらい必要性を感じているか、②学校で社会的スキル教育が実施されるとすれば、どのようなスキルを取り上げてほしいと思うかの2点についてである。また、本研究では中学生の保護者との比較検討のために、中台他（2003）によって収集された、中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査のデータについても再分析した。

方法

1. 中学生の保護者に対する調査

2003年10月に、ある中学校で開催された講演会に参加した中学生の保護者に「社会的スキル教育の必要度」と「社会的スキル教育で取り上げてほしいスキル」に関する調査用紙を配布した。講

演会のテーマは「学校で役立つ社会的スキル」であった。講演内容は、①スライドによる社会的スキル教育の説明、②社会的スキル教育の簡単なデモンストレーション、③社会的スキル教育の実践事例の紹介であった。講演会終了後に調査への協力を求め、回答後、その場で回収した。

(1)社会的スキル教育の必要度についての調査

「あなたは、下にあるそれぞれの時期において、社会的スキル教育を行うことにどのくらい必要性を感じますか。「まったく必要でない＝1」「あまり必要でない＝2」「少し必要である＝3」「かなり必要である＝4」「非常に必要である＝5」の中から、あてはまる数字にひとつだけ○をしてください。その他にも必要であると思う時期があれば、具体的にお書きください（例：大学）。」という教示文を用いて、7つの時期（①保育所、②幼稚園、③小学校1・2年、④小学校3・4年、⑤小学校5・6年、⑥中学校、⑦高校）についてそれぞれ必要度の評定を求めた。また、「その他」用の自由記述欄も用意した。

(2)社会的スキル教育で取り上げてほしいと思うスキルについての調査

「あなたが幼稚園教諭なら幼稚園で、小学校教諭なら小学校で、中学校教諭なら中学校で社会的スキル教育を実施するとします。その際、どんな社会的スキルを取り上げたいと思いますか。また、あなたが保護者なら保護者の立場で、どんな社会的スキルを取り上げてほしいと思いますか。下にある①～⑬のうち、取り上げたい、あるいは取り上げてほしいと思うものの番号に、いくつでもいいですから○をしてください。①～⑬の他にもあれば、その他の欄に具体的にお書きください。」という教示文（講演会には学校関係者も参加予定だった）に続き、13のスキル（表1の①～⑬参照；小林・相川, 1999；宮前・繪内・阪根・藤本, 2001を参考に作成）を列記した。また「その他」用の自由記述欄も設けた。

2. 中学校教諭に対する調査

2003年7月に、ある中学校区で開催された研修会に参加した中学校教諭に「社会的スキル教育の必要度」と「社会的スキル教育で取り上げたいスキル」に関する調査用紙を配布した。研修会のテーマは「子どもの社会性の育成と社会的スキル教育」であった。研修内容は、①スライドによる社会的スキル教育の説明、②模擬授業による社会的スキル教育の体験、③社会的スキル教育の実践事例の紹介、④社会的スキル教育を特集したテレビ番組（NHK, 2001）のビデオの視聴、⑤質疑応答であった。研修会終了後に調査への協力を求め、回答後、その場で回収した。

(1)社会的スキル教育の必要度についての調査

「あなたは、下にあるそれぞれの時期において、社会的スキル教育を行うことにどのくらい必要性を感じますか。「まったく必要でない＝1」「あまり必要でない＝2」「少し必要である＝3」「かなり必要である＝4」「非常に必要である＝5」の中から、あてはまる数字にひとつだけ○をしてください。その他にも必要であると思う時期があれば、具体的にお書きください（例：大学）。」という教示文を用いて、7つの時期（①保育所、②幼稚園、③小学校1・2年、④小学校3・4年、⑤小学校5・6年、⑥中学校、⑦高校）についてそれぞれ必要度の評定を求めた。また、「その他」用の自由記述欄も用意した。

(2)社会的スキル教育で取り上げたいと思うスキルについての調査

「あなたが幼稚園教諭なら幼稚園で、小学校教諭なら小学校で、中学校教諭なら中学校で社会的スキル教育を実施するとします。その際、どんな社会的スキルを取り上げたいと思いますか。下にある①～⑬のうち、取り上げたいと思うものの番号に、いくつでもいいですから○をしてください。①～⑬の他にもあれば、その他の欄に具体的にお書きください。」という教示文(当日は小学校教諭、幼稚園教諭も参加予定だった)に続き、上記の保護者に対する調査と同じ13のスキル(表1の①～⑬参照)を列記した。また「その他」用の自由記述欄も設けた。

3. 中学生に対する調査

中学生には「社会的スキル教育で学びたいと思うスキル」に関する調査のみ実施した。2002年9月下旬から10月下旬の間に実施された、中学校における社会的スキル教育(金山・中台・新見・斉藤・前田, 2003)に参加した中学生に、2003年3月中旬に調査用紙を配布した。調査対象となったのは中学生247名(1年生86名, 2年生86名, 3年生75名)であった。

調査用紙には「また今度、社会的スキル学習をするとしたら、どんなことを学びたいですか。学びたいと思うものの番号に、いくつでもいいですから○をつけてください。その他にもあれば、自由に書いてください。」という教示文(授業で、「社会的スキル教育」は「社会的スキル学習」と呼ばれていた)に続き、上記の保護者と中学校教諭に対する調査と同じ13のスキル(表1の①～⑬参照)を列記した。また「その他」用の自由記述欄も設けた。

結果と考察

1. 社会的スキル教育の必要度についての調査結果

保護者31名、中学校教諭20名から有効回答を得た。社会的スキル教育の必要度の評定値を従属変数とした2(群; 保護者・中学校教諭)×7(発達段階; 保育所, 幼稚園, 小学校1・2年, 小学校3・4年, 小学校5・6年, 中学校, 高校)の分散分析を行った。その結果、発達段階の主効果が有意だった($F_{(6, 294)}=6.77, p<.001$)。Ryanの多重比較($p<.05$)の結果は、保育所<小学校1・2年, 保育所<小学校3・4年, 保育所<小学校5・6年, 保育所<中学校, 幼稚園<小学校1・2年, 幼稚園<小学校3・4年, 幼稚園<小学校5・6年, 幼稚園<中学校であった。群と発達段階の交互作用も有意だった($F_{(6, 294)}=9.22, p<.001$)。下位検定の結果、保育所($F_{(1, 343)}=10.51, p<.01$)、幼稚園($F_{(1, 343)}=6.86, p<.01$)、小学校1・2年($F_{(1, 343)}=5.85, p<.05$)、中学校($F_{(1, 343)}=5.35, p<.05$)、高校($F_{(1, 343)}=8.52, p<.01$)の各段階における群の単純主効果が有意だった。保育所, 幼稚園, 小学校1・2年では保護者よりも中学校教諭の評定値が高く、中学校, 高校では中学校教諭よりも保護者の評定値が高かった。また保護者における発達段階の単純主効果が有意だった($F_{(6, 294)}=12.51, p<.001$)。Ryanの多重比較($p<.05$)の結果は、保育所<小学校1・2年, 保育所<小学校3・4年, 保育所<小学校5・6年, 保育所<中学校, 保育所<高校, 幼稚園<小学校3・4年, 幼稚園<小学校5・6年, 幼稚園<中学校, 幼稚園<高校, 小学校1・2年<小学校5・6年, 小学校1・2年<中学校, 小学校1・2年<高校であった。中学校教諭における発達段階の単純主効果も有意だった($F_{(6, 294)}=3.48, p<.01$)。Ryanの多重比較($p<.05$)の結果は、高校<小学校1・2年, 高校

＜小学校3・4年であった。

図1からわかるように、保護者の評定値は保育所から中学校まで階段状に増加していた。一方、中学校教諭の評定値は保育所から小学校3・4年までは増加し、その後は減少していた。また、小学校3・4年より低年齢の時期には、中学校教諭の評定値が保護者に比べて高く、小学校5・6年以上になると、逆に保護者の評定値が中学校教諭に比べて高くなっていった。すなわち、中学校教諭は小学校3・4年を頂点に発達早期から社会的スキル教育を実施する必要があると考えている。それに対して、保護者は中学校の時期を社会的スキル教育が最も必要な時期と捉えており、幼児期や児童期初期には、中学校教諭が思うほど、社会的スキル教育を必要であるとは思っていない。この結果は、調査対象が中学生の保護者であったためとも考えられる。今後、幼児や小学生の保護者にも同様の調査を行い、比較検討する必要があるだろう。いずれにせよ、平均評定値は保護者と中学校教諭、そして社会的スキル教育が実施される発達段階を問わず、すべて3点以上の値を示しており、全体的には、社会的スキル教育は「必要である」という見解が優勢であった。

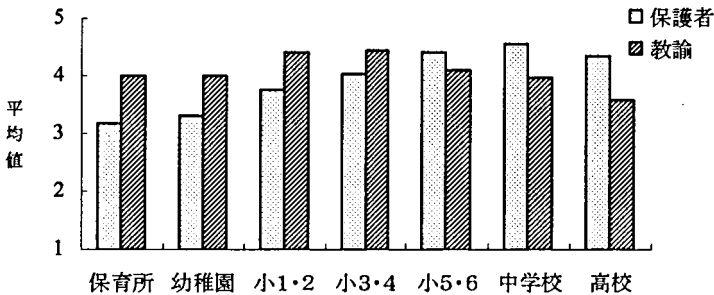


図1 社会的スキル教育の必要度の評定値

2. 社会的スキル教育で取り上げたい、学びたいと思うスキルについての調査結果

保護者35名、中学校教諭22名、中学生232名（1年生83名、2年生80名、3年生69名）から有効回答を得た。表1には保護者、中学校教諭、中学生の回答結果を示した。表2には中学生の回答結果を学年別に示した。表には各項目の選択人数、割合（選択人数/回答者数）、順位を示した。

保護者が取り上げてほしいと思っているスキルは「③上手に相手の話を聞く」と「⑧相手の気持ちを考えて接する」が同率の第1位で、次いで「⑩自分の意見や考えをはっきりと伝える」が第3位であった。中学校教諭が取り上げたいと思っているスキルは「⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する」が第1位で、「⑧相手の気持ちを考えて接する」「⑬イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」が同率の第2位であった。また中学生が学びたいと思っているスキルは「⑬イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする」（第1位）、「⑫誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する」（第2位）、「⑦はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける」（第3位）が上位3位であった。この傾向は学年別でもほぼ変わらなかった。

保護者、中学校教諭、中学生のいずれもが高いニーズを示したスキルは「⑧相手の気持ちを考えて接する」であった。保護者は第1位、中学校教諭は第2位、中学生は第4位（1年生では第4位、2年生、3年生では第3位）であった。このようなスキルを取り上げた場合は、授業に対する中学生の動機づけも高く、保護者の理解と協力も得られやすいと考えられる。「相手の気持ちを考えて接する」スキルの育成は、生徒の暴力やいじめの防止にも寄与すると考えられるので、中学生の社会的スキル教育において積極的に取り上げる意義があるだろう。

保護者と中学校教諭が上位にあげた「⑨上手に相手の話を聞く」（保護者第1位、中学校教諭第4位）や「⑩自分の意見や考えをはっきりと伝える」（保護者第3位、中学校教諭第4位）は、保護者や中学校教諭の思いに反して中学生のニーズはあまり高くない（それぞれ第12位と第7位）。このようなスキルを取り上げた場合、授業に対する中学生の動機づけは低いことが予想されるので、十分な対策が必要となるだろう。調査結果からすると、保護者の理解と協力は得られやすいと考えられるので、学校だけでなく、家庭においても、これらのスキルをくり返し練習する機会を積極的に設け、生徒がスキルを実行したときには適切に反応する、賞賛するなどして、スキルの実行に対する生徒の動機づけを高めるとともに、授業で取り上げることの意義を認識させる努力を重ねる必要があるだろう。

表1 社会的スキル教育で中学生の保護者、中学校教諭が取り上げたいスキルと中学生が学びたいスキル

項目	保護者 35名			中学校教諭 22名			中学生 232名		
	人数	割合	順位	人数	割合	順位	人数	割合	順位
① 上手にあいさつをする	23	66%	5	8	36%	7	52	22%	13
② 上手に自己紹介をする	15	43%	9	4	18%	11	72	31%	8
③ 上手に相手の話を聞く	26	74%	1	13	59%	4	53	23%	12
④ 上手に質問をする	14	40%	10	5	23%	10	61	26%	11
⑤ 遊びなどの仲間に入れてもらう	8	23%	11	4	18%	11	72	31%	8
⑥ 遊びなどの仲間にさそう	8	23%	11	2	9%	12	80	34%	6
⑦ はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける	20	57%	7	8	36%	7	112	48%	3
⑧ 相手の気持ちを考えて接する	26	74%	1	14	64%	2	110	47%	4
⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に頼む	6	17%	13	7	32%	9	72	31%	8
⑩ 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る	20	57%	7	10	45%	6	100	43%	5
⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える	25	71%	3	13	59%	4	78	34%	7
⑫ 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する	24	69%	4	16	73%	1	118	51%	2
⑬ イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	21	60%	6	14	64%	2	126	54%	1

表2 社会的スキル教育で中学生が学びたいスキル

項目	1年生 83名			2年生 80名			3年生 69名		
	人数	割合	順位	人数	割合	順位	人数	割合	順位
① 上手にあいさつをする	18	22%	12	11	14%	13	23	33%	9
② 上手に自己紹介をする	22	27%	10	19	24%	10	31	45%	4
③ 上手に相手の話を聞く	18	22%	12	17	21%	11	18	26%	13
④ 上手に質問をする	24	29%	7	12	15%	12	25	36%	8
⑤ 遊びなどの仲間に入れてもらう	23	28%	9	28	35%	6	21	30%	10
⑥ 遊びなどの仲間にさそう	32	39%	6	28	35%	6	20	29%	11
⑦ はげまし、なぐさめなどのあたたかい言葉をかける	39	47%	2	38	48%	4	35	51%	2
⑧ 相手の気持ちを考えて接する	36	43%	4	41	51%	3	33	48%	3
⑨ 自分のしてほしいことなどを上手に頼む	24	29%	7	28	35%	6	20	29%	11
⑩ 自分にとっていやなことやできないことを上手に断る	34	41%	5	37	46%	5	29	42%	7
⑪ 自分の意見や考えをはっきりと伝える	21	25%	11	27	34%	9	30	43%	5
⑫ 誤解や意見のくいちがいなどのトラブルを上手に解決する	43	52%	1	45	56%	2	30	43%	5
⑬ イライラしたり、ドキドキしたりした気持ちをコントロールする	38	46%	3	49	61%	1	39	57%	1

本調査は特定の地域，特定の学校で実施したものである．社会的スキル教育で求められるスキルは，地域や学校の特性などによって異なってくると考えられる．そのため，結果の解釈にはこの点が考慮されるべきである．

引用文献

- 藤枝静暁 2002 小学生を対象にしたソーシャルスキル・トレーニング 津村俊充（編） 教職研修総合特集 151 子どもの対人関係能力を育てる 教育開発研究所 Pp.206-209.
- 平塚市教育委員会 2004 平成 15 年度研修一覧 <http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/kyouiku/kenkyu/kensyuu.htm> (2004.2.10)
- 金山元春・中台佐喜子・新見直子・斉藤由里・前田健一 2003 中学校における学校規模の社会的スキル訓練 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域），52（印刷中）
- 河村茂雄 1999 社会スキル不全 内山喜久雄・山口正二（編） 実践 生徒指導・教育相談 ナカニシヤ出版 Pp.84-97.
- 小林正幸 2003 子どもの社会性を育てるソーシャル・スキル・トレーニング 11—ソーシャル・スキル教育で目指すもの— 月刊学校教育相談, 17 (1), 50-55.
- 小林正幸・相川 充（編） 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校—楽しく身につく学級生活の基礎・基本— 図書文化
- 宮前義和・繪内利啓・阪根健二・藤本光孝 2001 社会的スキル訓練に関する小，中学校教員の調査 香川大学教育実践総合研究, 3, 33-45.
- 森田 勇 2003 ソーシャルスキル・トレーニングの活用のポイント 河村茂雄（編） “教職研修” スタートブック第3巻 “人間関係づくり” スタートブック 教育開発研究所 Pp.91-93.
- 長野県総合教育センター 2004 平成 15 年度研修講座生徒指導研修 http://www.edu-ctr.pref.nagano.jp/kensyu/seito_s/340202.htm (2004.2.10)
- 中台佐喜子・金山元春・斉藤由里・新見直子 2003 小，中学校教諭と中学生に対する社会的スキル教育のニーズ調査 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部（教育人間科学関連領域），52（印刷中）
- NHK 2001 クローズアップ現代 No.1457—学校で人とつきあう技術を教える— 2001 年 7 月 17 日テレビ放送
- Reid, J. B., & Eddy, J. M. 2002 Preventive efforts during the elementary school years: The Linking the Interests of Families and Teachers (LIFT) project. In Reid, J. B., Patterson, G. R., & Snyder, J. (Eds.), *Antisocial behavior in children and adolescents: A developmental analysis and model for intervention*. Washington, DC: American Psychological Association.
- 吉村 英 2003 社会的スキルと攻撃性 京都女子大学教育学・心理学論叢, 3, 87-111.

謝辞

本研究にご協力を賜りました皆様に心から感謝申し上げます。